

有斐閣選書

昭和の文学

紅野敏郎
三好行雄
竹盛天雄
平岡敏夫
編

近代文学史 3

和の文学

* 近代文学史 3 *

敏郎・三好行雄
天雄・平岡敏夫
編



有斐閣
選書

編者紹介

こうのとしろう 紅野敏郎	早稲田大学教育学部教授
みよしゆきお 三好行雄	東京大学文学部教授
たけもりてんゆう 竹盛天雄	早稲田大学文学部助教授
ひらおかとしお 平岡敏夫	横浜国立大学教育学部助教授

昭和の文学(近代文学史3) <有斐閣選書>

昭和47年4月25日 初版第1刷印刷
昭和47年4月30日 初版第1刷発行

¥ 700.



編者	紅 三 竹 平	野 好 盛 岡	敏 行 天 敏	郎 雄 雄 夫
発行者	江	草	忠	允
発行所	株式会社	有	斐	閣

東京都千代田区神田神保町2-17
電話 東京(264) 1311 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座 東京370番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 大日本法令印刷・製本 和田製本
©1972, 紅野敏郎・三好行雄・竹盛天雄・平岡敏夫。
落丁・乱丁本はお取替いたします。

1391-080310-8611

はしがき

明治維新以来、百余年間に生み出された文学作品は、数知れず、その中で、時代を超えてなお輝きつづけ、国民の精神の糧として読みつがれている作品も、また、数多い。さらに、時代の変転とともに一時的には埋もれていても、新しい照明のもとで生命を蘇らせた作品も少なくない。これらの近代文学の伝統と蓄積の上に、現代の我々の文学も存在している。文学の享受とは、作品・作家と自己との語り合いにはかならず以上、まず、文学作品に親しむことが先決であるが、そのためにも、近代文学の歩みを歴史的・体系的に把握し、理解しておくことは、必要不可欠なことである。この『明治の文学』『大正の文学』『昭和の文学』の三冊が、そうした意味で、近代文学への理解と関心を呼び起こす一つの契機になれば、と願っている。

近代日本文学の歩みは、容易ではなく、羅針盤のない船が、暴風雨の中を彷徨し、苦闘したさまに似ていた。それは、封建制社会から一挙に近代資本主義の仲間入りをし、西洋文学の荒波と、近代日本社会の急激な地殻変動の二つに挟撃された航海であった。その中で、得たものも、失ったものも多かったはずであるし、強靱に貫

いてきたものもあるはずである。その航跡を、今、明快に提出しうる段階には至っていないだろう。歴史のまだ浅い近代文学研究は、今なお、その探求途上にあると言える。この三冊も、確定的なひとつの構図、ひとつの結論に到達しているわけではない。明治・大正・昭和の区分や章だても、ほぼこれまでの研究成果に準じたものだと言ってよい。それは、この三冊が、単独執筆ではなく、共同執筆であることにもよっている。しかし、それだけに、作家・作品・文学史への多様な接近や新しい視角を見出すことができるはずである。

この三冊は、専門家や研究者でない読者にも読みやすいように、また、文学史の概観をつかみやすいように、構成上、さまざまな工夫をした。概説とは別に、主要な作家をとりあげ、文学史叙述と作家論・作品論を組み合わせることで、従来の類書の陥りがちな平板さを避け、清新な「文学史」を目ざしてもいる。また、作家論の中でも、叙述を理解しやすいように、可能な限り、主な作品のあら筋を入れるとともに、現在の段階における価値評価にも意をもちいた。

過去の作家・作品と、現代を生きる人びとの出会いや交流の生々とした姿から、我々が学びうるものは多い。作家・評論家・研究者の方に、特別に執筆していただいたのは、そのためである。我々の無理なお願いを快諾された方々に、心から感謝したい。

多数の執筆者の協力によってつくられた、この三冊の本が、近代文学の研究や鑑賞への有意義な試みとして世に迎えられ、新しい近代日本文学史樹立のためのささやかな一布石ともなるならば、我々の喜びは、これに過ぎるものはない。最後に、共同執筆という煩瑣な仕事にもかかわらず、労苦を惜しまず、すぐれた論稿を寄せて下さった執筆者の方々に深く感謝の意を表したい。

昭和四七年四月

紅野敏郎	三好行雄	竹盛天雄	平岡敏夫
------	------	------	------

◆執筆者紹介(執筆順)◆

磯貝英夫▽大正一二年生。現在、広島大学文学部教授。

主著『昭和文学作家研究』(昭三〇、柳原書店)、
『資料集成日本近代文学史』(昭四三、右文書院)

祖父江昭二▽昭和二年生。現在、和光大学人文学部教授。

主論文『プロレタリア文学』(『岩波講座日本文学史』第一三卷、昭三四、岩波書店)、『プロレタリア文学の展開』(『講座日本文学』第一卷、昭四四、三省堂)

保昌正夫▽大正一四年生。現在、武蔵野美術大学教授。

主著『横光利一』(昭四一、明治書院)、『昭和批評大系』(編著)(昭四三、番町書房)

竹盛天雄▽昭和三年生。現在、早稲田大学文学部助教授。

主論文『日本近代文学における父と子の問題』(『国文学』昭四四・一〇～一二)、『坊っちゃん』の受難』(『文学』昭四六・一二)

小笠原克▽昭和六年生。現在、藤女子大学教授。

主著『島木健作』(昭四〇、明治書院)、『昭和文学史論』(昭四五、八木書店)

吉田熙生▽昭和五年生。現在、東京女子大学短期大学部教授。

主論文『小林秀雄』(『近代文学鑑賞講座』第一七卷、

昭四一、角川書店)、『中原中也全集別巻研究篇』(昭四六、同)

川崎展宏▽昭和二年生。現在、共立女子大学短期大学部教授。

主著『高浜虚子』(昭四一、明治書院)

菅井幸雄▽昭和二年生。現在、明治大学文学部教授。

主著『リアリズム演劇論』(昭四一、未来社)、『演劇の伝統と現代』(昭四四、同)

古林尚▽昭和二年生。現在、『文学的立場』同人、京華高校校論。

主著『ごくま星座』(編著)(昭二八、岩波書店)、『戦後派作家は語る』(対談集)(昭四六、筑摩書房)

三好行雄▽大正一五年生。現在、東京大学文学部教授。

主著『島崎藤村論』(昭四一、至文堂)、『作品論の試み』(昭四二、同)

松原新一▽昭和一五年生。現在、評論家。

主著『沈黙の思想』(昭四一、講談社)、『大江健三郎の世界』(昭四三、同)

瀬沼茂樹▽評論家。

伊藤信吉▽詩人

野口富士男▽小説家。

長谷川泉▽評論家

楠本憲吉▽俳人。

安田武▽評論家

目次

はしがき

第1章 昭和文学の出発

1 知識階級の動揺

磯貝英夫 3

不況の深刻化 (3)

知識人の不安 (4)

文芸思潮の崩落 (5)

★芥川竜之介

磯貝英夫 7

○芥川の死とその反響 (7)

晩年の作品 (8)

2 プロレタリア文学運動の展開

祖父江昭二 10

マルクス主義文学・芸術組織の三派鼎立 (10) 日本左翼文芸家総聯合の結

成 (11) 全日本無産者芸術聯盟 (ナップ) の成立 (12) 「プロレタリア・

レアリズム」の提起 (13) 文学観念変革の批評活動 (その二) ——芸術大

衆化論争 (14) 文学観念変革の批評活動 (その二) ——芸術的価値論争 (16)

新しい作家の登場 (18)

★小林多喜二——祖父江昭二 21

初期の多喜二 (21) 『一九二八年三月十五日』 (22) 『蟹工船』 (23)
その死まで (24)

★徳永 直——祖父江昭二 26

生粋の労働者 (26) 『太陽のない街』 (27) その後の歩み (28)

★黒島 伝治——祖父江昭二 30

農民文学者黒島 (30) 反戦文学者黒島 (31) 唯一の長編『武装せる市街』 (32)

3 新感覺派から芸術派へ——磯貝 英夫 34

新感覺派の退潮 (34) 形式主義文学論争 (35) 新興芸術派とモダニズム (36) 『文学』——正統芸術派 (37) 新心理主義文学 (39) その他——梶井基次郎、小林秀雄、阿部知二 (39)

★横光利一——磯貝 英夫 41

横光利一の変遷 (41) 新感覺派から心理主義へ (42) メカニズムの恐怖——『機械』 (43) 心理主義から日本主義へ (44)

★梶井基次郎——磯貝 英夫 46

感受性の論理の追求——『檸檬』 (46) 梶井の生涯 (48) 闇への情熱——『冬の蠅』 (49) 世間への眼——『のんきな患者』 (49)

4 明治・大正文学の系譜

保昌正夫 51

「円本」のころ (51) 同伴者文学 (52) 独立経営の作家たち (54) 二

つの創作特集 (55)

★島崎藤村

保昌正夫 58

『分配』 (58) 再婚 (59) 『夜明け前』 (60) 『東方の門』 (61)

★谷崎潤一郎

保昌正夫 66

『饒舌録』 (66) 『正』、『夢喰ふ虫』 (67) 『物語』の時代 (68) 『細雪』の前後 (70)

★嘉村磯多

保昌正夫 72

「業苦」の文学 (72) 脱葛西の姿勢 (73) 「二人一党」の文学 (74)

第2章 昭和一〇年代の文学

1 プロレタリア文学運動の挫折

祖父江昭二 81

コップの成立 (81) 弾圧とナルプの解体 (83) プロレタリア文学運動の積極的特徴点 (85) 社会主義的リアリズムと人民戦線 (86) 抵抗と転向 (89)

★中野重治

祖父江昭二 91

詩人中野重治の抒情 (91)

評論家中野——政治と文学の峻別と統一 (92)

転向文学の極北 (93)

★島木健作

祖父江昭二 95

転向者の文学——『頼』を中心に (96) 『生活の探求』——転向の飛躍と完成 (96)

2 明治・大正文学の命脈

竹盛天雄 98

位置のエネルギー (98) 志賀直哉に見る一つの型 (100)

私小説・心境小

説の蘇生 (104) 蓄積された文学伝統 (104)

★幸田露伴

竹盛天雄 106

出離と幻境 (106) 巨大な歴史文学の世界 (107) 創作集『幻談』の達成 (108)

★永井荷風

竹盛天雄 111

傍観と源委探究 (111) 『つゆのあとさき』による復活 (112) 『溷東綺譚』の世界 (113)

★徳田秋声

竹盛天雄 116

自然主義の莊嚴 (116) 老苦と沈黙 (117) 『町の踊り場』による復活 (118) 『仮装人物』の方法 (119) 『縮図』の達成 (120)

3 昭和文学の形成

小笠原 克 125

昭和一〇年前後 (125) 文芸復興のムード (126) 『文学界』の夢 (127)

「相互浸透」のゆくえ (127) 行動主義の旗 (128) シェストフの不安 (129)

異母兄弟——『日本浪漫派』と『人民文庫』 (130) 横光利一『純粹小説論』

(131) 中間文学論の先行 (132) 昭和一〇年代作家 (132) 阿部知二、伊

藤整 (133) 丹羽文雄、舟橋聖一 (134) 芥川賞、直木賞創設 (135) 高見

順、太宰治 (135) 彗星の軌跡——岡本かの子、北条民雄 (137)

★川端康成 小笠原 克 138

現実のかなたへ (138) 孤児の感情 (139) 日、本、的、美、学、の、位、相 (140)

★堀 辰雄 小笠原 克 145

心理主義小説の新登場 (145) 『風立ちぬ』——ロマンのフーガ的展開 (146)

『菜穂子』——芥川体験の集大成 (147)

★石川 淳 小笠原 克 149

『文学大概』 (149) 『普賢』 (150) 戦中の諸作 (151) “無頼派”の核とし

て (152)

★小林秀雄 小笠原 克 153

『私小説論』——「社会化した『私』」の問題 (153) “美”と“歴史”へ (155)

4 戦争下の文学 小笠原 克 157

第3章 詩歌と戯曲

★中島 敦

- 日華事変から太平洋戦争へ (157) あいつぐ筆禍事件 (158) 『麦と兵隊』
 — 戦争文学隆盛 (158) “日本”への回帰 — 保田与重郎 (159) 亀井勝一
 郎の“信念更生” (160) “旅愁”のなかで — 一般的順応 (161) 非順応
 の群れ (162) 非順応の姿 — 昭和作家 (164) 評論家群像 (165) 座談会
 『近代の超克』 (166) “出発”まで (167) 小笠原 克
 中島敦の生涯 (169) “狼疾”的個性 — 『山月記』など (169) 『李陵』 (171)

169

1 現代詩の成立

- 破壊と高揚 (175) 物質と自我 (177) 吉田 瀨生
 情の問題 (182) 伝統と象徴主義 (179) 日本的抒
 西脇順三郎 (185) 吉田 瀨生

175

★西脇順三郎

- 西脇順三郎とモダニズム詩の運動 (185) 西脇の「超自然主義」 (186)
 『Ambarvalia』の世界 (188)

185

★三好達治

吉田 瀨生
 190

『測量船』の多様性 (190) 三好達治の抒情性 (192) 『捷報いたる』の問題

(193)

★中原中也

吉田 熙生

195

中原中也の文学史的位置 (195) 「人間詩人」中原中也 (196)

『山羊の歌』

の倦怠と述志 (197) 『在りし日の歌』の成熟 (198)

2

短歌と俳句

川崎 展宏

1 昭和の短歌

200 200

三つの出来事と昭和短歌のあり方 (200) 反伝統の運動 (201)

既成歌壇の

動き (202) 注目すべき歌集と歌人 (203)

2 昭和の俳句

204

四Sの登場 (204) 花鳥諷詠 (205)

『馬酔木』の独立と新興俳句運動 (205)

茅舎の世界、人間探求派 (207)

3

新劇と戯曲

菅井 幸雄

211

政治と演劇との関連 (211) 『劇作』派の役割 (213)

新協・新築地時代の

深化 (215) 戦中演劇の潮流 (218)

★久保 栄

菅井 幸雄

220

リアリズム戯曲への志向 (220)

演劇実践の過程 (221)

古典の摂取 (221)

運動者の戯曲 (222)

限界状況下のドラマ (223)

戦後の断絶 (224)

第4章 戦後の文学

1 昭和二〇年代の文学

古林 尚

227

老大家の復活 (227)

新日本文学会の成立と民主主義文学 (228)

『近代文

学』派の活動 (229)

「政治と文学」論争 (230)

戦後派文学の登場 (231)

ニヒリズムとデカダンスの文学 (233)

知性派の文学 (233)

私小説と風俗

小説 (234)

その他の注目作 (234)

第二次戦後派の台頭 (235)

★野間 宏

古林 尚

237

登場のころ (237)

『暗い絵』 (238)

ブリュッゲルの絵のイメージ (238)

金銭と愛情の渇渴にゆがむ青春 (239)

自己保存と我執の臭い (240)

組織

と自我の問題 (241)

★椎名麟三

古林 尚

242

登場のころ (242)

『深夜の酒宴』に見られる暗い人間像 (243)

作者自身の

経歴に照応 (244)

知的な思考の滲透した描写 (244)

否定評価と反論 (245)

椎名文学の原点 (245)

その後の歩み (246)

★宮本百合子

古林 尚

247

民主文学の第一声 (247)

こみあげる解放感 (248)

「後家のがんばり」へ

の反省(249) その経歴(249) 歌声よ、おこれ(250) ビルドゥングス・
ロマンの作家(251)

★太宰 治 古林 尚 252

美しいへほろびの歌(252) 没落から恋と革命へ(253) せめて背徳の道
でも(254) 出自の重荷と脱落者意識(255) 太宰文学の原点(255) 頽廃
の否定的な戯画化(256)

★大岡昇平 古林 尚 257

『俘虜記』の誕生まで(257) ミンドロ島での戦場体験(258) 一瞬の逡巡が
投げかける問題(258) 『俘虜記』の構成と原点(259) その後の歩み(260)

2 詩歌と演劇 265

1 戦後の詩歌 三好行雄 265

詩的近代の瓦解(265) 戦後詩の諸相(266) 短歌における戦後(268)
短詩型文学批判(269)

2 戦後の演劇 菅井幸雄 271

戦中の軌跡と戦後の屈折(271) 社会的生成物としてのドラマツルギー(273)
劇団制の強化(274) 演劇の有効性の探求(277) 劇団制の動揺(279)

★木下順二 菅井幸雄 280

戯曲論の前提(280) 緊張概念の成立(281) 演劇による問題提起(282)

民話のドラマツルギー (283) 抵抗主体の形成 (284)

★三島由紀夫

菅井幸雄 286

方法意識の総括 (286) 文体を通しての古典と現代 (287) 現実と虚構 (288)

政治的理念の燃焼 (289)

3 現代文学の動向

松原新一 291

第三の新人 (291) 「繁栄」のなかの文学 (294) 『太陽の季節』のもたらし

たもの (296) アンガージュマンの文学 (296) 現代文学の多様性 (298)

反リアリズムの文学 (301)

★大江健三郎

松原新一 304

イメージの作家 (304) 実存的なもの (305) 社会的なもの (306)

近代作家とわたし



◆島崎藤村とわたし 瀬沼茂樹 63

◆室生犀星とわたし 伊藤信吉 75

◆徳田秋声とわたし 野口富士男 122

◆川端康成とわたし 長谷川 泉 142